



Title	学生の「問題意識」に視点をおいた教育経営論(II) : 事例研究をもとにした課題解決的学級経営論の一考察
Author(s)	山谷, 敬三郎
Citation	年報いわみざわ : 初等教育・教師教育研究, 15: 13-22
Issue Date	1994-03
URL	<a href="http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/8602">http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/8602</a>
Rights	本文ファイルはNIIから提供されたものである。

# 学生の「問題意識」に視点をおいた教育経営論（Ⅱ）

～事例研究をもとにした課題解決的学級経営論の一考察～

山 谷 敬三郎

## はじめに

筆者は、教職員の現職研修に携わって7年になる。最近、管理職の研修にも携わっているが、学級担任の教師や管理職にあるものが、教育活動を充実するための「教育経営」の在り方についての学習を強く求めていることを年数を追うごとに感じている。しかし、日常の学校における教育活動の合い間をぬって、体系的にその学習をすることは、かなりの時間的制約がある。そうしたことから、学校という組織体の一員としてその経営活動に積極的に参加しようとする認識が、教職員一人一人に十分育っているとは言い難い。その主な理由は、教職員個々が、「教育活動」と「経営活動」の主体を隔離、分離して理解していることがあげられる。このことは、教職員に「経営活動」とは他律的な計画・統制作用としての意識を持たせ、「教育」と「経営」を対立・分離させることにつながっている。

教育経営は、教師間で、教育理念の意味共有化を図り、学校の教育目標としてそれを措定し、その目標達成に向けた協働の推進やその組織化を図る、自律的な計画、統制作用であり、学校における教育的人間協働を保持・推進していく働きである。その意識を教育現場にどう根付かせるかが現職教育に携わっているものとしての課題でもあり、また、教員養成に携わっているものとしての課題でもあると考えている。

前稿<sup>(1)</sup>において、学生の「教育経営」に対する問題意識を整理し、「教育」と「経営」の統合に関する教育経営論の基礎的な論述を試みた。しかし、教育活動と経営活動の統合の場である学級を中心に論述することは紙幅の関係で省略せざるを得ず、その課題のみを列挙した。本稿では、学級という場を中心に「教育」と「経営」の統合を図る学級経営論を事例研究をもとにして展開するものである。

## I KJ 法的手法による学生の問題意識の構造

図-1は、平成5年度後期の「教育経営論」の講義を始めるに当たって、参加した学生に記述させた「教育経営」に対する問題意識をKJ法的手法を用いて構造化したものである。図中の□に囲んだものは、学生それぞれが記入したものであり、二重線に囲んだものは、彼ら自身が島づくりをとおして名付けた表札である。(a)～(n)の記号と点線、破線、実線は、筆者が整理するために付けたものである。37名にそれぞれ2枚のカードを配布し、1枚のカードに1課題を記入させた。それらは(a)～(n)の島に分類することができる。さらに、それぞれの表札で示される島の中のカードを見てみると、今日的な教育課題や教育経営に対する学生自身の問題意識が浮き彫りになってくることがわかる。こうした学生の問題意識を見てみると、学級経営の基本的なことや、登校拒否やいじめをはじめとする問題行動への対処や指導など、学級という場における具体的な指導の方策や手立てに対する問題意識が多いことに気付く。これは、平成4年度における学生の問題意識でも共通に見られたことでもあった<sup>(2)</sup>。昨年度受講の学生では、年度途中の実施となった学校週5日制の対応についての問題意識が多いことが目立ったが、今年度もこの点についてはやや少ないものの共通に見られた。

図-1に見られる14の島に分けられる課題のうち、ここでは(d)~(i)を中心に取りあげる。



図-1 教育経営論に関する問題意識のキーワード構造図

## II 事例研究の概要

下にあげた事例資料をもとにして、事例研究的な方法を用いて学級経営の在り方を討議してみた。というのは、学級経営を演繹的方法からとらえさせるのではなく、帰納的方法からとらえさせることが、この「教育経営論」におけるテーマである、「教育」と「経営」の統合の意識を学生に認識させることになると考えたからである。なお、取り上げた事例は、いじめを理由として登校をしぶるようになった児童を抱える学級担任教師の悩みをどう解決するかというものである<sup>(3)</sup>。この事例を選択したのは前期の図-1に示した学生の「教育経営」に対する問題意識、(d)~(i)を総合的にとらえさせることをねらいとしたからである。概ね、右の表-1のような段階をふまえて授業を進めた。

- |   |                      |
|---|----------------------|
| ① | 事例について各自に読ませる。       |
| ② | この事例の問題点を指摘させる。      |
| ③ | 問題点についての視点の整理を行う。    |
| ④ | この事例の長所を指摘させる。       |
| ⑤ | 改善のための方策をまとめる。       |
| ⑥ | 方策の相互交流を図る。          |
| ⑦ | レポートを書かせ、その内容の深化を図る。 |

表-1 事例研究のステップ

### 事例資料「落ち着きのない学級 (小学校)」

A小学校は、B町立の小学校である。B町の産業は農業が中心で、酪農が6割、畑作が4割である。人口は3,800人余りである。

住民の気風としては、おおらかで、のんびりとしたところがある。酪農の仕事は早朝から日没まで手を離すことができないため、家族揃っての団欒の時間はとれない家庭が多い。A小学校は各学年2クラスの12学級である。教員数は15名(男10名、女5名、20~30代が9名、31~40代が2名、41代~60代が4名)で構成されている。PTA活動は、学校行事にだけは積極的な協力が得られるものの、家の仕事が忙しい等の理由で他の活動への参加者は少ない。

C教諭は教職経験が5年目の27歳の女性で、現在、5年2組(男子16名、女子14名)の担任である。前任校では新任として4年間勤務し、2年生と3年生の学級担任を経験している。4月から、前任校での経験を生かし、前任校と同じ手順で学級経営をしてきたが予想外のことがたびたび起こり、思うように学級経営ができなくなっている。学級の状況は、編成替えがあったためか、4月当初から、授業中でも、勝手に友達と話をしている子供が多く、全体的にザワザワと落ち着きがない。

C教諭は、その都度大声で注意しているが、最近では10分間ともたない状況にある。家庭学習についても、熱心に取り組んでくる子供は4~5名にすぎず、ほとんど定着していないのが実態である。

また、学級の仕事についても、一部の子供を除いて、全体的に無責任なところが目立ち、特に清掃活動では、途中で投げ出して遊んでいることもたびたびである。C教諭は、自分なりに、いろいろ手を変え、品を変えて指導してはいるものの、学級の状況はまったく改善されていない。そんな中で、6月初め頃、身体が他の児童より一回り大きく、スポーツ万能のD子を中心に仲良しグループができた。D子がはばをきかせはじめてきたと思っていた矢先、D子がE子をトイレに呼び出し、いじているという報告を受けた。

さっそく、C教諭は関係したD子、E子を一人一人呼び、事実の確認をしたが、D子は絶対していないと否定し、E子もいじめを肯定しなかった。そんなことがあってから1週間後、E子は朝起きると腹痛や頭痛を訴え、学校を休んだ。それをきっかけとして、E子は早退しがちになり、学校を休んで休むようになった。C教諭は数回家庭訪問をし、E子や両親とも話し合っているが、欠席は今も続いている。

C教諭にとって、クラスの落ち着きのなさ、学級の仕事に対する無責任、D子、E子の指導など、これから先、どのように対応すべきか途方にくれる日がここ数日続いている。

## III 事例から導き出された学級経営の課題

前記の事例研究の流れにそって、この学級の問題の解決に向けて、筆者と学生、学生相互による討議を中心にして授業を進めた。具体的には、(a)問題点の把握、(b)それらの問題点の把握の視点の整理、(c)長所の把握、(d)改善策の把握、等を通して、学生自身が事例の学級担任、C教諭であったらどのようにこの学級を改善していくか、また学級経営全体をどのように展開していくことが大切かをテーマにした。これらの討議を通して、学生自身に学級経営上の課題を統合的にとらえさせることを最終的なねらいとした。

授業全体を、(a)この学級の問題点、(b)この学級の長所、(c)改善のための手立て、の順で考察し、

学級経営における今日的な課題を明らかにしたい。

### 1 学生が指摘した問題点と学級経営改善の視点

受講生全員に、この事例の学級の問題点を口頭発表させた。37名全員に指名させたところ、次の14点の問題点を指摘した。

- ① 勝手に友達と話をする子供が多い。
- ② C教諭が前任校と同じ手順で学級経営をしている。
- ③ 決まりが守れていない。
- ④ 全体的に無責任である。
- ⑤ いじめがある。
- ⑥ PTAの参加が少ない。
- ⑦ 地域・父母との連携がうまくいっていない。
- ⑧ 家庭の団欒の少ない中で育った子供が多い。
- ⑨ クラスのまとまりがない。
- ⑩ E子が腹痛や頭痛を訴え、学校を休んでいる。
- ⑪ 家庭学習についてほとんど定着していない。
- ⑫ 全体的にザワザワと落ち着きがない。
- ⑬ E子へのサポートがないクラスである。
- ⑭ C教諭と子供の信頼関係がない。

さて、これらの問題点の把握の段階で、検討しなければならないことがいくつかある。それは、(a)この事例のような学級の状況に対して学級担任自身が危機意識をもっているかどうかということ、(b)その問題点が事実としてのものか、類推によるものか、という事例の解釈の問題、(c)その問題点の主体と客体はだれか、という三つの視点である。この三つの視点にたって、それぞれの問題点を把握し、整理することが学級経営上大切なことである。

第一の視点は、学級担任自身が、自分の学級のこのような状況を自己の問題として、また、解決を図るべき問題として認識しているかどうかということの意味している。こうした自分の学級に対する危機意識は、教師個々の教育観に依拠することと考えられる。しかし、学校教育に寄せられる期待、教師個々の教育に対する使命感が問われる現在、学級担任一人一人が学校教育に対する基本的理念や社会の期待を正面からしっかり受けとめ、自己の学級経営を展開することが求められているのである。

第二の視点は、事例を検討していくうえで一般的に留意しなければならない「理解」についての検証の問題である。いいかえると、事例の中の問題に対する理解の根拠がどこにあるのかという解釈の問題である。生徒指導上の問題を抱える児童生徒への対応でよく直面する「理解と指導」の関係において、全てを理解しなければ指導できないとか、理解が誤っていると、理解が一面的であるとか、理解そのものを再度自らに問うことの必要性を意味している。これは、問題とされていることがどのような根拠に基づいたものであるか、ということの認識にかかわることであり、学級経営を展開する上での基盤となる児童生徒理解の問題でもある。上記の学生の指摘した、③、⑦、⑨、⑬、⑭は、類推の域を出ない問題を指摘しているということ、そして、そうした共通の認識のうえで、問題点を参加者全員で確認しておかなければならない。

第三の視点は、問題点そのものが学級経営上のどの部分に位置付くことなのか、ということを確認することである。学級担任その人の姿勢の問題、上記の問題点からは①、②、⑦、⑭、子供たち全体の学級生活上の問題（③、④など）、学級における個々の子供の問題（⑤、⑩）、家庭・地域社会の問題（⑥、⑦、⑧）、そして、学級経営を含めた学年・学校経営上の問題、などに整理しておくことが必要である。つまり、「誰が、誰に」働きかけなければならないかを明らかにすることで

ある。これは、学級経営の学校経営上の連関の認識に関わることであり、改善方策の具体的立案にかかわる課題である。

ここであげた問題点の分析のための視点が、学級経営改善の具体的方策の立案や日常の学級経営における学級担任の構えとして必要となる。

## 2 学生が指摘した長所と学級経営改善の視点

次に、この事例の学級における長所を口頭発表させた。これは、問題行動や学級経営における様々な問題に対する解決方策を講じる際にどうしても省くことができないことである。つまり、解決方策の立案に対する糸口ともなるからである。

以下の8点があげられた。

- ① 住民の気風がおおらかで、のんびりしている
- ② 若手の教師が多い
- ③ 学級は編成替えがあったので友人関係が固定化されていない
- ④ 授業で10分間はもっている
- ⑤ 責任感の強い子もいる
- ⑥ 家庭学習も4～5名は熱心にしてくる
- ⑦ 友達同志での仲はよい
- ⑧ 家庭訪問するなどC教師はあきらめていない

これらは、学生が先にあげた問題点と表裏一体の関係にあることがわかる(②、③、④)。しかし、これら長所をあげさせることは、学級経営上、非常に重要な意味をもつ。我が国の学級はその成立の過程で、同一年令の集団に同一内容の教育を、学級という固定的な集団に対して一斉に教授する場として成立してきた。このことは、集団をある一定のねらいのもと、一定の方向に向かわせる指導が最良とされてきたといってもよい。そこでは、その指導からはみ出るものは、指導上の特別の対象とされてきた。つまり、集団の秩序を維持するために、一人一人の子供の持つ欠点を引き上げ、長所を平均化する働きかけが少なからず教師の指導の背景にあったことは歪めないのである。こうした背景からは、規律の遵守という学級経営がその中心的な在り方となる。つまり、管理的な学級経営が想定される。こうしたことの打開策として、個性伸長という視点から、学級経営を改善することが重視されなければならない。

## 3 学生が指摘した改善策と学級経営改善の視点

学生に、自分がC教諭だったらまず何をするかを発表させた。それらは次のようなことであった。

- ① D子とE子の問題の解決
- ② 教師の姿勢の改善
- ③ リーダーの育成
- ④ 他の担任と連携すること
- ⑤ 授業の改善
- ⑥ 役割分担の徹底
- ⑦ 児童個々との触合いを多くし、児童理解を深める
- ⑧ 授業を子供たちの興味ある展開に改善する
- ⑨ 行事を増やす
- ⑩ 面接をする
- ⑪ けじめある生活をさせる
- ⑫ グループ学習などグループ活動を取り入れる
- ⑬ 実験などを取り入れた活動を多くした授業の実践

- ⑭ D子との話し合いをし、D子自身をクラスのリーダーにする
- ⑮ 児童の発言の場や機会を多くする

これらの指摘を整理していくと、先にあげた問題点の整理の第一と第三の視点の重要性が明確になる。つまり、改善策にあげられた一つ一つがC教諭の問題として、学生に自覚されており、さらに、それらの問題の一つ一つの主体がC教諭にあり、改善策の一つ一つがその客体となっていることである。そして、学生自身は無意識ではあるが、もう一つの学級経営の改善の視点であり、課題であることを指摘していることが分かる。それは、学生自身が、短期間のうちに早急に解決しなければならない問題(①、④、⑥、⑦)と長期的な展望にたって解決を目指さなければならない問題(②、③、⑤)の両者を指摘していることである。学級経営は、学校経営と同じく経営体の一つであるが、直接、児童生徒にかかわることから、指導と評価において常に児童生徒の変容を考慮に入れなければならない。このことは、学級経営においてもその経営の方略として短期的方策と長期的方策の観点を設定し、具体的な取り組みを常に想定し、実践しなければならないことを意味する。

#### IV 課題解決型学級経営論の展開

事例をもとにして、今日的な問題を抱えた学級担任の学級経営に対する方策と学級経営上の課題を論じてきた。しかし、こうした学級経営における課題は、単に今日的な課題であるばかりでなく指摘してきたように学級担任個々の学級経営上の資質、力量と深くかかわることと考える。

問題点の指摘とともに考察してきた、「学級担任の学校教育に対する危機意識」「児童生徒理解の在り方」「学校経営の連関における学級経営」、長所の指摘とともに考察してきた「個に視点を当てた学級経営の計画化」、改善策の指摘で考察した「期間的視点における指導と評価」などの視点に対応するための学級経営の基礎的、基本的な展開について、以下それぞれ論述する。

##### 1 学校教育への期待と役割

人間の教育は家庭に始まる。しかも、人間の成長・発達、その時期に応じる心身の特徴を示しながらも、全体的・統一的であるとともに継続的である。学校制度が拡充・整備され、学校教育が進展するに伴って、学校教育の始期は早まる傾向にあるが、それには自ずからなる限度がある。したがって、学校はある時点から、親や社会の教育期待に応える形で子供の教育を引き受ける。そのような「教育の場」として、学校は時間的・空間的限度をもつが、人間の成長・発達が全体的、継続的であるが故に、学校教育は就学以前の、そして、学校以外の場での子供の生活を考慮に入れなくてはならない。今日、生涯学習の視点から、学校の教育機能が問われ、その改善が問題として提起されてはいるが、「知育」が学校教育の中心的機能であり、それが学校に期待されている教育面であることは動かないであろう。しかし、そこで取り上げられる教育内容には、一定の基準による選択・配列の操作が必要であり、抽象化が行われている。学校教育が抽象的・客観的性格、言い換えると、一般性をもつことがその特質である所以である。このことは、子供の認識の側面から見るとウィーク・ポイントともなっている。なすわち、学校教育は、ややもすれば、現実生活から遊離し、それとの不調和、不連携を引き起こす傾向を常に内包しているからである。社会生活の中から選択され、抽象化されて学校の教育内容となった基礎的、基本的な知識・技能の習得には、知識体系・技能体系の単なる受け身的な需要によってではなく、子供の具体的経験やそれまでの認識に基づく主体的学習が不可欠である。すなわち、学校教育は一般性を特質としながらも、その教育目標は、一人一人の子供の具体的経験や認識を手がかりにしなくては達成されない。まさに教師の役割は、一般性の教育を目指しながら、体系づけられた一般性を押し付けることによってではなく、子供の具体性の中に含まれる一般性を啓発する仕方によって目的を達成することにある。このことの意味を学級担任は日常の教育活動における教育内容と地域や父母の教育要求の両者からの的確に把握し、学

級経営を展開しなければならない。

## 2 学級経営の基礎としての子供理解

教師の子供理解が、その行動上における反社会的な側面に重きがおかれることを指摘したウィックマン研究の報告<sup>(4)</sup>がなされたのは今から66年前の1928年であった。この指摘にもあるように、我々教師の理解は、常に集団を相手にしていることからその行動面の整然さ、子供の性向からみると、従順さと正直さを求めることから、精神科医等が注目する非社会的な行動様式よりも反社会的な行動様式を重視することの傾向はうなづける。しかし、自分の学級の実態をとらえることが学級担任に求められるとき、単に子供たちをある一定の尺度を基にして理解するのではなく、理解そのものの仕方や統合的な理解ということが問題となる。このことは、教師の子供たちを理解する教師の目そのものを疑うことから始めなければならないことを意味する。次にあげた表-2は、児童生徒理解の諸相を整理したものである。

ここにあげた教育的理解とは、「もう一步の理解」と言いかえてもよい。私たちは、子供たちの行動を理解するとき、その行動の背景にある原因を追求しようとする。しかし、その原因を理解する一步手前で止まることが多い。特に、問題行動に陥った子供たちとのかかわりで気付くことは、このもう一步の理解が容易には進まないことである。

① 一人称的理解	: 児童生徒の容貌、態度、動作などの外面的なものから、観察者の経験や価値観などをもとに、性格、能力などを理解すること 「主観的理解」「印象的理解」「外面的理解」「直観的理解」ともいう
② 二人称理解	: 児童生徒個々の価値観、動機、悩み、心情などを、その子なりの立場に立った受容的な姿勢で理解すること 「共感的理解」「心情的理解」「内面的理解」「受容的理解」ともいう
③ 三人称的理解	: 調査、検査、家庭環境調査、生育歴、友人関係、学業成績などの客観的事実をもとに、性格、適性、進路、能力などを理解すること 「客観的理解」「診断的理解」「分析的理解」「科学的理解」ともいう
④ 教育的理解	: 関係的理解とも考えられる。児童生徒との関係の改善や指導上の困難を乗り越えるとき、児童生徒が未来に開かれている存在であるという姿勢で理解すること 「生物的存在としての理解」「心理的存在としての理解」「社会的存在としての理解」「未来的存在としての理解」ともいう

表-2 児童生徒理解の諸相

そこには、児童生徒と教師の信頼関係がもたなければならないことは当然であるが、このことの実現のためには、学級担任自身が児童生徒の存在そのもの尊重するという基本的な心構えが必要となる。

大村はま氏は、このことの大切さを「同和教育」の実践者との話から次のように私たちに呼び掛けている<sup>(5)</sup>。

奈同教の会合で、雨が降った日のことだった。「かさだなに、かさが並んでますやろ」と、感慨深そうに見やりながら、私にこんな話をしてくれた。1957年ごろ、片塩中学の中川先生である。

かさ立てで、まだしずくのたれているかさを4、5本、わしづかみにするやいなや、ポーンと外へほうりだした生徒がいた。先生は瞬間、腹を立てた。しかし、思いなおすと、他の先生やクラスの者の目のつかない校舎の裏へ、その子供をつれだした。

「なんでかさ捨てたんぞ」と、きいたが返事をしない。「めったに怒らんから、いうてみ」とさすと、やっと「先生、ぼくがわるかった。これからはもうしゃへん」といいにくそうにあやまった。ふつうなら、それで「こんどからするなよ」でおわりになる。しかし、「同和」教育にとりくもうとしているものは、こんな返事で満足できなかった。

「わるいことしたてか。先生はそんなことより、なんでやきいてるんな。それをいうてくれ」

「先生、かっこわるい。もう、きかんとって」

なおもくいきがっていると、「そんなやったら、おれ、いうわ」とぼつりぼつり話しだした。「おれの家には、かさが二本しかないねん。おとっさんが工場へ一本さしていく。弟は小学校へ一本もっていく。俺、学校へ来う思てもかさがない。行こか、行くまいか、なんべんもでたりはいったりした。そいでも、雨、やみよらへん。決心して、もう休んだろ、思て家へはいったけど、先生がいつも、どんなことがあっても休むな、いうてるやろ。思いだしてん。そいで雨ん中、走ってきてん。ぬれたんはかまへん。そやけど学校へ来たら、俺にないかさ、ぎょうさん並んでるやろ。俺、カッとしてん。ほんでほかしてん。」

先生は、しばらくものがいえなかった。「よういうてくれた。これからも、何があっても先生にいうねぞ」といったら、生徒はポロポロと涙をこぼした、という。「これからはしません」ですませない。もう一步つっこんで原因を追求する。子供の心をくみとる。「これが同和教育や思いましてん」と、先生は言葉を結んだ。

すばらしい教師が生まれつつあると、心がジーンとした。



### 3 学級経営の基本としての計画化

新しい学力観が提起され、その理念の実現に向けて様々な課題が実践に移されようとしている。いま、何よりも子供を直接指導する学級担任こそが自覚的にこれらの課題の解決に取り組まなければならない。その意味で、学級担任教師の持つ、教育上の役割は極めて重く、その力量が問われるのは当然である。しかしながら、学級担任の職務の範囲を考えると、それがまた極めて幅広い分野に広がっているために十分な専門的技術や力量を獲得することは難しいと考える。また、そのために実際の指導では、対処療法的な対応に終始してしまう傾向にあることが実態であると考えられる。確かに、学級経営は、教育機能と経営機能が混在してしまっているために、その統合的な把握が難しいだけでなく、その職務を十全に行うとすれば、際限がないほどに奥が深いものである。そうした中で、学級経営の基本的な部分について、二つの視点から考察する。

#### (1) 学校経営の実践の場としての学級経営

学級経営の計画化の段階で、今日、より重視されなければならない視点は、学級経営が、学年経営、学校経営に明確に位置付けられることである。つまり、学校、学年、学級はともに経営体であり、それぞれ Plan→Do→See のマネジメント・サイクルを形成し、それが相互に連鎖機能をもっているということの認識が大切である。このことを高階玲治氏は次のような図2をもって次のように説明している<sup>(6)</sup>。

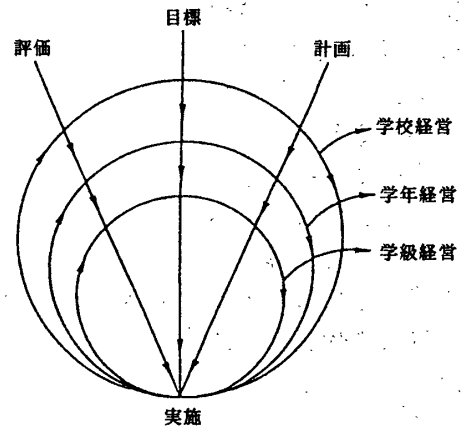


図-2 学校経営と学年・学級経営との関連

つまり、「この経営の連鎖機能の第一の課題は目標の統合である。今日、社会の変化に対応した学校教育の創造に向け、教職員の創意を生かした学校づくりが叫ばれている。その場合、校訓的な学校の教育目標のみを対象として、その具現化を図ろうとしても意味がない。学校の目標系列は、学校の教育目標→年度の重点教育目標→学年目標→学級目標、と

具体化されているのが一般的である。したがって、このような学校の目標設定過程において、学校の教育課題が明確にされ、教職員の意志形成が十分考慮されているかどうか」という認識である。

学校の教育目標の達成過程は、学校の教育目標を学年、学級目標に具現化する方向と年度の重点教育目標に学校の諸課題を明示し、その課題を学校の研究主題やテーマとし、そのテーマ設定に見られる子供の実態把握に基づく授業等の改善や、各分掌が課題設定し解決する方向の二方向において実施される。これら両者が学校の教育目標の具現化の方策として、いわば、車の両輪として機能することが望ましいのである。こうした、学校の教育目標における共通目標の具現化、共通課題の具現化の設定や計画化が教職員に共通理解され、各学級担任に意識化され、実践に移されることが大切である。

#### (2) 個に視点をあてた計画

学級担任が日常の指導でもっとも力を入れることのひとつに、学級の秩序維持がある。カミングスは『ニッポンの学校』の中で、「日本の教師たちは、学級の秩序維持に最も力を注ぐ」<sup>(6)</sup>、と述べている。特に、授業において、その傾向が強いという。その結果、わずかな注意で学級の秩序が守られることが多く、子供を授業に集中させる教師の労力は、アメリカの教師の半分以下ですむ、という意味のことを言っている。確かに子供が一斉の形で授業に集中することは、教師が望む授業を展開することが可能であり、子供たちの学習理解が促進されるように考えることもできる。しかし、自分の学級に対する所属感や活動を通して得る満足感単なる秩序維持の指導だけでは到底可能なものとはならない。

学級経営計画表 (7月計画表)

日	主要行事	学習指導	児童理解	特別活動	家庭との連携	学級環境
1	木 町研教科部会	「問い」を生ませ、学ぶ意欲を高める 「二学期の学習の方向」として、学習への心がまえを促す	月始めとしてどんな心がまえを持ってすごすか促える	6月の反省に基づいた自分の目標を設定する 各班会議を持ち7月の努力目標と活動計画を設定する(今日の目玉は?)	親子レクに向けての準備 学級通信での内容の周知	・絵画展(風景画)に向けて
2	金 附小研究視察					
3	土					
4	日					
5	月 花壇整備通開 朝会	解法の構想を立て、盛り上げる(追究への意欲化)	まとめの月として、学習生活両面においての一人一人のよさ、問題点の発見	○班長会議をセットし、学級の問題を考える	学級通信(7月のがんばり)	個々の追究を提示(学習の様子学び合えるように)
6	火 クラブ、貯金日					
7	水 研修					
8	木 町研					
9	金 委員会、学年会	一人追究の充実	よさの伸長 問題になる部分の治療	学級会で、1学期中のくらしについて、問題をとり上げ、改善の方法を全員で探る	学級通信	大発見コーナーの充実
10	土 土休					
11	日					
12	月 集い、校務部会					
13	火 クラブ	追究の交流を図り、個々の良さを認める、自分に気づく	夏休みへ向けての意欲化心がまえを知る	○今学期中の班、個人について、目標との関わりで反省する(良さ、伸びた、という面を中心に)	学級通信 1学期中の反省 2学期に向けて	自由研究の紹介他
14	水 研修					
15	木 職会					
16	金 児委					
17	土 全校参観日	修正、追加をしながら、自分を広げる	○夏休み中の学習、研究について、自分なりに計画、課題の設定、構想化を図る ○研究の例、方法の紹介	○夏休み中の班、個人について、目標との関わりで反省する(良さ、伸びた、という面を中心に)	学級通信 夏休みのすごし方通知表について	自由研究の紹介他
18	日					
19	月 評価事務					
20	火					
21	水 夏休、図書貸出し、あゆみ提出	新たな「問い」の発見	○1学期中に学習した事項を復習する。(基礎になる部分) ○課題を作り、自分なりの方法で調査、解法→まとめ(自由研究)	全体で交流	学級通信	自由研究の紹介他
22	木					
23	金 研修					
24	土 職会 あゆみ発行、終業式					
25	日 児童委員会	○夏休み中の学習、研究について、自分なりに計画、課題の設定、構想化を図る ○研究の例、方法の紹介	○計画に従って充実した休みをすごす ○毎日の反省を行うように促す	○夏休み中のすごし方について自分なりに考え、計画する	学級通信	自由研究の紹介他
26	月					
27	火					
28	水					
29	木	夏休	一人一人が考えて創る。友達のよさを認める。とことんチャレンジ	○計画に従って充実した休みをすごす ○毎日の反省を行うように促す	学級通信	自由研究の紹介他
30	金					
31	土					
備考						

表-3 学級経営月別計画表

現在、個性を生かすための様々な学習活動が取り入れられようとしているとき、学級担任はまず、個を生かす視点から学級の目標の設定に当たることが必要である。従来の学級の目標が集団をそろえる視点からのものが多かったことの反省に立ち、今後は個人志向的な目標を取り入れることを考慮すべきである。また、学級経営案の作成においても、単なる年間のスケジュールを作成するのではなく、月別の学級経営計画を作成するなど、個に視点をあてた学級経営の計画を立案すべきである。表-3は、学級の教育目標の具現化や児童生徒個々に視点をあてた学級経営の月別計画のモデルである。こうしたその月の学校行事や教育活動に視点を当てた、学級経営の具体的な計画が必要である。

4 学級の雰囲気把握

学級経営の評価は、その評価が年度内の指導に活かされるように機能しなければならない。したがって、実施に当たっては、学校評価よりも短い期間、例えば、学期や月毎に実施されなければならないものである。そうした意味からも、表-3に示したような月別の学級経営計画の利用やその中に評価を取り入れることは重要である。さらに、こうした経営的な評価のみならず、学級担任と教師の人間関係や学級の雰囲気をつかえ、その結果を学級経営に生かす工夫や努力がいじめなどの防止につながる。

図-3に示したものは、二つの学級を対象に

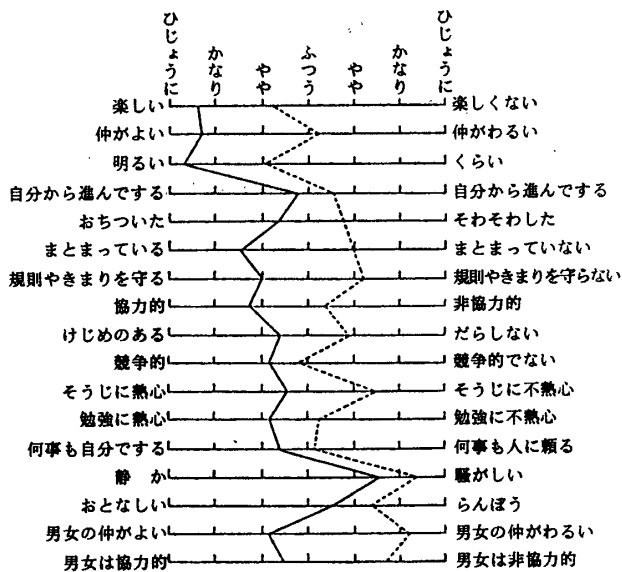


図-3 SD法による学級雰囲気

佐藤静一氏らがSD法を用いて測定した学級の雰囲気の結果である<sup>(7)</sup>。学級の構成員である児童生徒自身によるこのような評価を学級経営に実際に生かす具体的な手立てを工夫することが大切である。最近の児童生徒は、学級における集団とのかかわりが、その後の人生の対人交渉能力の基礎を培う主要な機会となっていることから、児童生徒自身の学級に対するイメージを的確に捉え、あわせて、そのイメージに対する学級担任の自覚が学級経営上の重要な要因になっていることを考慮しなければならない。さらに、このような調査による「わたしのクラス」の評価結果を学年部会の中で相互に比較することが、自己の学級経営の実践に多くの示唆を得ることになる。

## 終わりに

学級経営は、閉ざされた経営体では存在しえない。それは、学年、学校経営への連関において、子供たちの学習の内容において、子供たちの生活の場の広がりにおいて、さらに、子供たちの人間関係の広がりにおいてであり、子供たちの未来においてである。

こうした開かれた学級経営の在り方は、「教育」と「経営」の統合を図るうえでの基本となることである。今後ますます学級担任教師に投げかけられる課題は、その解決に困難をもたらすものであることが予想される。しかし、教師一人一人がそれらの課題に自己を投げ出して、教師の存在を自らに問う時、その方向を見失うことはないと思える。

本校で、「教育経営」について学生と一緒に考える機会を得、また、こうしてその実践の一部を紙面に公表する機会に恵まれたことに感謝しつつ、脱稿する。

(本校非常勤講師 教育経営論)

## 注

- (1) 拙稿「学生の『問題意識』に視点をのいた教育経営論」年報いわみざわ14号 北海道教育大学 岩見沢分校 平成5年3月
- (2) 拙稿前掲書
- (3) この事例は、筆者の勤務する北海道立教育研究所の学級経営研修講座の演習にも活用しているものである。
- (4) Wickman, E. K. "Children's behavior and teachers' attitudes" 1928 New York : Commonwealth Fund.
- (5) 大村はま「教えるということ」 共文社 昭和48年
- (6) 高階玲治「学年・学級経営の活性化と学校経営」『教育展望』平成3年4月 教育調査研究所
- (7) カミングス 「日本の学校」 サイマル出版
- (8) 佐藤静一 「学級担任教師の指導型と学級雰囲気及び学級意識に関する実証的研究」日本教育心理学会第13回総会発表論文集 1971